

学級創造活動 1年にじ組

活動名「あそびのめいじんになろう！」

支援者 玉木 祐治 先生

1年生の発達段階に合わせた25分間が設定されていました。まずは、子どもの思いや願いを大切に学級創造活動を行うからこそ、子どもたちが主体的に、共感的・協同的に取り組む姿が見られました。

【子どもの活動】

1 友達の前日のエピソードから、価値を生み出す対話をする。



前の時間のことを伝えたい人を尋ねる



前の時間の体験談を語る

2 今日の活動内容・問いを吟味し、決定する。



一人一人と本時の活動について対話する



決まった活動を板書する

3 追究活動をする。



自分で決めた活動を追究する



教師は気になる子どもへ関わる

【玉木先生コメント】

問いの変化を受容する支援によって、個の見取りが充実し、子ども理解につながったと思います。西野先生からの、これは問いではない、興味だという言葉が印象に残りました。問いの質、活動の質をどう豊かにしていくかが今後の課題だと思います。どの子どもも本気になれるような価値対話の方法を今後考えていかなければいけないと思いました。

玉木実践【第1学年 学級創造】

～あそびのめいじんになろう！～



本実践の主張点

子どもが自己や集団にとって意味のある価値を創造する

見方・考え方を育むために

方 策 : 子どもの問いの変化に着目した支援を行う。

評価の在り方: 個のエピソードから価値を生み出す対話を取り入れる。

子どもの問いの変化に着目した支援について

◆問いの変化に着目した支援が必要である段階を想定する

6年生で個人追究ができるようになるために、「1年生の段階でどのような経験をするべきか？」という課題意識を玉木先生がもち提案された。子どもの興味関心がどんどん変化していくという1年生の特性に合わせて、まずは子どもがもっている興味関心をどんどん行わせていくことが大切だと捉えた。そして、自分の興味関心にあったものをとことん追究するからこそ、本当に自分が取り組みたい課題を見出すことができるのである。このように、**本当に自分の好きなことを毎日取り組めることが保障されていることは、本校のカリキュラムの魅力の1つである。**

◆活動内容・問いの変化を受容し、支援に生かす

子どもにすべて任せるだけでは、個人追究に向かう土台は築かれない。玉木実践では、活動内容を決めた根拠を書かせるようにしている。そして、その根拠を表出させることで、その子の思いを教師は知り、その思いや願いに合わせて支援をすることができる。本時の授業においても、本時に取り組む活動を決めた子どもから玉木先生にノートを見せに行き、その時間の活動内容を決定していた。

西野先生の指導の中にも、問いの重要性が指摘されていた。そして、玉木提案におけるものは、問いというよりも、関心なのではないかとご指摘された。**教師は問いを立てるモデルとなるよう、教師から問いを発していくことの重要性**を示された。また、本校のように個人追究になり、活動が分かれて行われる場合には、教師がその様子を見ていない場合が多くなる。だからこそ、**近くの友達が見ている教師に報告したり、場合によっては、その子どもが問いを発したりするようにしていくことが大切**であると言われた。この西野先生の指導からも分かるように、個人追究をしていけるためには、自分の中で「どうしてだろう」「なぜだろう」という問いが生み出せるようにしていかなければならない。そして、この**問いを生み出すことは、学級創造活動だけで育むのではなく、教科学習においても、縦割り創造活動においても意識して取り組まなければいけない課題である。**

◆集団決定から自己決定へ 年間プロセスの段階を工夫する

1年間を3つのプロセスに区切り、子どもに意識して欲しい価値を教師が判断し、子どもに意識させることから、だんだんと子ども同士で判断していくように考えている。このように段階を追って支援していくことで価値を創造することができる見方・考え方が育まれると考える。再度、自分のクラスの学級創造活動において、年間計画をど

個のエピソードから価値を生み出す対話を取り入れることについて

◆個のエピソードから価値を生み出す対話を取り入れる

玉木提案においては、冒頭の10分間を価値対話の時間として位置付けている。その良さとして次の2つを考えている。1つ目は、価値対話したことが自己評価の視点となることである。これは、ある意味、子どものものさしを生み出し、共有している時間と捉えることができる。2つ目は、残りの時間で体験活動の時間を保障することである。学級創造活動の時間だけでなく、その後のなかよしタイムの時間も含めると本当に多くの時間を確保することができる。

25分間という短い時間を有効に活用するためには、ある程度、学級の中で時間の使い方についてルールを設けることが有効である。また、玉木提案にもあるように、**価値創造する時間をどのように設定するかを教師がしっかりとつこと**である。当然、玉木提案のように、毎時間設定する方法も考えられるだろう。中学年以降では、月曜日の45分間の長い時間を使うことと、1週間に1回行うという方法も考えられる。どの方法を用いるにしても、体験だけではだめである。子どもが価値を創造する・表出する・吟味する機会をしっかりと保障するようにしたい。

成果と課題

○6年間の期間を意識し、その上で目の前の子どもにとってどのような経験を積み重ねることが必要なかを明確にすることで、個人追究することができる子どもを育てることができる。

○価値について吟味する時間を設けることで、創造活動で目指している価値を創造することができる子どもが育つ。

△子どもが問いを見出すことができるようにするための支援の在り方について研究を深めていく必要がある。